

国 語 問 題

注 意 事 項

- 1. 試験開始の指示があるまで問題冊子を開いてはいけません。
- 2. この問題冊子は 24 ページです。落丁、乱丁、印刷不鮮明などの箇所がある場合には申し出てください。
- 3. 問題冊子および国語解答用紙（マークシート）と国語記述解答用紙が配布された後、各解答用紙の所定欄に座席番号・氏名・フリガナを正確に記入し、国語解答用紙（マークシート）の座席番号欄には座席番号を正しくマークしてください。
- 4. 解答は必ず国語解答用紙（マークシート）の指定された箇所に正しくマークし、記述式問題の解答は国語記述解答用紙に記述してください。マーク箇所を誤った解答は無効です。
- 5. マーク解答欄記入上の注意

- (1) 解答は指定された解答欄にマークし、その他の部分には何も書かないでください。例えば、

20

 と表示のある問いに対して、③と解答する場合には、次の例のように**解答番号 20**の**解答欄**の③にマークしてください。

例

良い例	悪い例

解答番号	解					答					欄				
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮
20															

- (2) 複数の解答がある場合も、同じ解答欄にマークしてください。ただし、指示された解答数より多くマークした場合は、その解答はすべて不正解となります。
- (3) 解答用紙へのマークはすべて H B のシャープペンシルまたは鉛筆で行い、訂正する場合にはプラスチック製消しゴムで丁寧によく消し、消しくずはきれいに取除いてください。
- (4) 解答用紙は絶対に汚さないでください。また折り曲げたり破ったりしないでください。
- (5) 解答欄の所定欄以外の余白部分は、何も記入しないでください。記入したり、汚したりすると解答用紙読み取り時の誤読の原因となり、採点できない場合があります。
- 6. 国語記述解答用紙については、注意事項をよく読み、指定された設問について解答しなさい。
- 7. 試験時間中に退場することはできません。
- 8. 問題冊子は必ず持ち帰ってください。
- 9. 解答用紙は持ち帰ってはいけません。

I 次の文章を読んで、あとの設問に答えなさい。

この空想という他の動物にはない独自の知性。それを人類は進化の過程でなぜ獲得したのだろうか。その理由について膨大な数の学説が出されているが、本当のところはまだよく分かっていない。脳の発達と関係していることは明らかであるが、その脳がなぜ発達したのかにも諸説ある。

人類学で主流な説としては、樹上生活をしていた私たちの祖先が地上へと降り立ち、直立二足歩行を始めたことがタンチョ^(ア)になっっているというものである。二足歩行の結果として両手が使えたこと、咽頭を降下させ音声言語の発達へと結びついたこと、そして直立姿勢になることで脳の重量を支えられるようになったこと。そういった因果関係が唱えられている。それは約二〇〇万年の人類の歴史の中ではそう古いことではないようだ。その進化の過程で生まれた空想が人類を「人間」へと進化させたのではないだろうか。

「サピエンス全史」を書いたイスラエルの歴史学者であるユヴァル・ノア・ハラリは、約七万年前から三万年前の人類の頭の中で「認知革命」と呼ばれる何かが起こったと述べている。おそらくその頃、見えないものを観るまなざしが私たちの祖先の頭の中に生まれたのではないか。そしてそのまなざしが自分自身に向けられたのだ。様々な生き物が満ち溢^{あふ}れて生きている自然の真只中^{ただ}で、むき出しのまま投げ出され、自分の存在に初めて気づいたに違いない。それはエデンの園で自らが裸であることに気づいたアダムとイブのようだったのかもしれない。自分の存在が理解できず、なす術^{すべ}もなく恐れおののいていたことだろう。空想が自意識を生み出したのである。

自分の存在に一度気づいてしまうと、それがなくなってしまう死を理解する。それは自分を存続させたいという欲望を強くし、その存続を脅かすものに対する恐怖を呼び起こす。その渴望と恐怖はさらに空想を刺激し、自分を救済する存在や脅かす存在を頭の中に生み出す。神や悪霊という見えない超自然的な存在の姿が、自然のあちこちに向けられるまなざしに重ね合わせられるのだ。それが信仰を生んだのではないか。⁽¹⁾信仰は自意識の芽生えとともに生まれたと考えられる。

自分の存在とは非常に不安定である。私たちは身体の一部を見ることができし、自らの影や反射した像を見ることがもできる。しかし自分の存在そのものを直接見ることはできない。また自分の心の中も見ることができない。それが確かな存在であるということを証明するのは私たちの中にある連続した記憶ではない。

A 記憶は非常に不安定だ。眠ってしまうと記憶を失うこともある。過剰な想像力は記憶を捻^ねじ曲げ書き換えることもある。だからその記憶

を担保するものを外部に求めるようになる。岩や巨木のように変わらないものや、太陽や月や星のように一定のリズムで動く天体に神聖な意味が込められたのは、不安定な自分の記憶をつなぎとめるものであったのであろう。

なぜ人類が洞窟の奥深くに入っていく、そこにある岩壁に何かを刻んだのか。その場には存在せず、自らの頭の中にしかない風景を描くのは、記憶を通して自分が確かなものであることを確認する行為だったのかもしれない。そしてそれを刻むことが同時に、ふたたびやってきた時に記憶が連続していることを確認することにもなる。芸術表現とは、そうした自分の

さらに自分の存在や記憶を担保する最も重要なものが他者である。互いにまなざしを交わしあい、常に誰かによって自分の存在を確認しつづけることが重要な意味を持つ。人間が協力しあう理由には生存のためと同時に、

B 何度も繰り返し自分の存在を確認することで、人間は自分を揺るぎない確かな存在として想像していく。人類が進化のどこかで自らにまなざしを向けたことは、私たちのすべての始まりである。それは見えないものを観る力である空想がもたらしたのではないだろうか。

人類のキョウタンすべき⁽¹⁾ことは、空想を生みだしたことだけではない。この空想を互いに共有する方法についても、発達させたことである。それが音声言語という意思疎通の方法である。これが見えないものを観る力をさらに拡大させ、人類を他の動物とは決定的に違う存在へと変えた。

ゴリラやイルカなども、鳴き声などを通してシンボリック・コミュニケーション^{*1}を行うことができる。しかし人間に備わった意思疎通の能力は、その場所に指し示されるものがない抽象的な事柄や、この世に存在しない架空の事物や概念も表現し、それを共有することができるのである。この能力は空想を一人の頭の中にとどめず、別の個体の頭にも移し、それを共に広げていくことを可能にした。複数の頭の中で増幅された空想は、さらに別の空想を生みだし、次々と空想を前に進める要因となったのだ。

頭の中の空想を育て、それを共有することで互いに協力する方法を取ったことは、自然界の中で人間という種をさらに特殊な進化の形態へと進ませた。それは形質や遺伝子を変化させる生物学的な「進化」ではない。自らの意思で自らの状況を改善・改良していく社会的な「進歩」という言葉の方が当てはまるのかもしれない。

C 進化・進歩のいずれと呼ぶにしても人間の場合、そうした変化は個体ごとに起こるわけではない。互いに協力しながら空想を積極的に共有し、交換しながら膨らませていくのだ。空想は見えないからこそ、その存在を共に確認し、互いの中での現実にしていく。厳しい自然の中で人間が協力しあうための役割も果たしていたのである。

他の動物は自然の本能に従って協力しあっている。しかし人間だけはそこから外れて、独自の方法を取ったのだ。それが存在しないものを頭の中に描き、その見えないものを共に観るとい**い**ささか**狂**った方法である。実際には存在しないものに目を向け、それを現実だと思い込むのは、動物からすれば病氣以外のなにものでもない。しかし現に人間はその能力を存分にクシ**て**文明を築いてきたと言える。

⁽³⁾ 文明は壮大な空想の産物である。そこに存在しないものを実現することで文明を前に進めてきた人間の歴史は空想の上に築かれている。ないものから何かを生み出す空想という能力は創造と拡大の方向を向く。その能力が自然にはこれまで存在しなかった人間独自の**システム**である文明を生み出した。それは農業を通じて自然のどこにもなかった生態系を生みだし、さらに工業都市や世界規模の産業社会を確立した。空想されたことは次々に現実へと変わっていく。そして遂**に**は、見えない情報が飛び交う現代の情報社会へとたどり着いた。そこでは空想が現実を生み出すだけではない。空想そのものが現実なのである。

これまで人間が価値と信じてきたもののほとんどは目に見えないものである。言葉、芸術、文化、宗教、法律、財産、地位、名声、国家、理念、平和、愛。どれも実体ではなく、私たちの頭の中で共有されているものだ。その空想を私たちは大切にし、その空想のために悩み苦しみ努力する。そのために私たちは命そのものを危機にさらすこともあるのだ。

肉体を維持するために不可欠な食事ですら空想とは無関係ではない。動物は料理をしない。私たちの食事の理由が単に肉体を維持するだけであれば、これほど複雑な料理も豊富な種類も必要ないはずである。私たちの食事は、栄養セツシユ**を**求める肉体の要求だけで成り立っているのではない。空想というよりも「妄想」からの要求の方が食欲に占める割合は大きいのではないか。そうでなくては人間が肉体を壊すまで食べる理由は説明できない。そう考えると私たちが肉体として生きるのに本当に必要なものなどごくわずかである。文明の生産物のほとんどは私たちの空想を満たすためにあると言**っ**ていいだろう。

同時に人間は様々な問題がそこに「ある」ものとして空想する。だからそれを「ない」状態にしようとして、なくそうと努力する。それがなくなつて解決すると、また次の問題を見つけてそれをなくそうとする。それが延々と繰り返される。問題発見と問題解決と言われるものは、そもそも問題を「ある」とする空想の処理である可能性があるのではないか。

文明とはそんな飽**く**な**き**空想の追求である。空想の本質とは、そこ**に**ないもの“へとまなざしを向けることである。だから私たちはそこ**に**ないものを空想し、それが実現すると、次にまたそこ**に**ないものを空想する。空想は現実を生み、それがまた次の空想を生む。そうやって空想が拡大

しつづけ、その果てに空想が現実である現代社会が生まれた。

こうした空想を追い求めて未来へ発展するという考えは、一見すると正当な理由を持っているように見える。人間がより良き方向へと発展すること自体を否定すると文明の意味は失われてしまう。しかしその「より良き」が意味するものを取り違えると、いつか文明の方向は反転する。苦しみや痛みを減らして、快適で心地よいものを追いかけることが「より良き」であると解釈すると、私たちは間違えてしまうかもしれない。空想は未来を見つめる一方で、「今」に満足しない。⁽⁴⁾文明がその空想にもとづいている以上、私たちは永遠に満足できない可能性がある。

(ハナムラチカヒロ『まなざしのデザイン——〈世界の見方〉を変える方法』より。出題にあたって本文を一部改変した)

*注1 シンボリック・コミュニケーション 言葉、ジェスチャー、画像などのシンボルを通じて意味を伝えるプロセス

問一 傍線部(ア)・(イ)・(ウ)・(エ)のカタカナは漢字でどう書くか。解答例にならない、それぞれ①～⑩の中から正しい組み合わせとなる漢字を二つずつ選び、同一解答欄にその番号を両方ともマークしなさい。

(ア) 1

(イ) 2

(ウ) 3

(エ) 4

(解答例) コウケン

- ① 高
- ② 貢
- ③ 工
- ④ 功
- ⑤ 幸
- ⑥ 猷
- ⑦ 権
- ⑧ 堅
- ⑨ 謙
- ⑩ 件

答 ② ⑥

(ア) タンチヨ

- ① 丹
- ② 単
- ③ 短
- ④ 端
- ⑤ 淡
- ⑥ 猪^{ちよ}
- ⑦ 著
- ⑧ 貯
- ⑨ 緒
- ⑩ 蹠^{ちよ}

(イ) キヨウタン

- ① 叫
- ② 興
- ③ 強
- ④ 驚
- ⑤ 脅
- ⑥ 胆
- ⑦ 端
- ⑧ 担
- ⑨ 探
- ⑩ 嘆

(ウ) クシ

- ① 駆
- ② 功
- ③ 工
- ④ 句
- ⑤ 久
- ⑥ 仕
- ⑦ 死
- ⑧ 支
- ⑨ 思
- ⑩ 使

(エ) セツシユ

- ① 接
- ② 摂
- ③ 節
- ④ 拙
- ⑤ 窃
- ⑥ 取
- ⑦ 種
- ⑧ 守
- ⑨ 手
- ⑩ 珠

問二 傍線部(a)・(b)・(c)の本文中の意味として適切なものを、それぞれ①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

(a)

5

(b)

6

(c)

7

(a) なす術もなく

① 全く何もせず

② 当面の間、やるべきことがなく

③ 何とかしようとする気持ちもなく

④ 使える魔術もなく

⑤ どうすることもできず

(b) いささか

① 完全に

② あまりに

③ わずかばかり

④ おかしいと思うくらい

⑤ ひどく

(c) 飽くなき

① 素晴らしい

② 抱くことができない

③ 完璧な

④ 満足することのない

⑤ あり得ない

問三 空欄 A ・ B ・ C に入る語句の組み合わせとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

8

①	A 一方で	B このように	C むしろ
②	A 確かに	B そのため	C ただし
③	A したがって	B このように	C ただし
④	A 一方で	B こうして	C しかし
⑤	A 確かに	B こうして	C しかし

問四 空欄 X に入る言葉として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

9

- ① イマジネーション
- ② インサイト
- ③ コミュニケーション
- ④ アイデンティティ
- ⑤ ファンタジー

問五 傍線部(1)「信仰は自意識の芽生えとともに生まれた」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

10

- ① 自意識が芽生え、死の恐怖と生への渴望が強くなったため、自分を脅かしたり救済したりする存在を自然の中に見出すようになった。
- ② 自意識が芽生えたため、空想ができるようになり、自分を脅かしたり救済したりする存在を考えるようになった。
- ③ 自意識が芽生え、あちこちから向けられる自分へのまなざしによって恐怖が呼び起こされたため、神や悪霊を信じるようになった。
- ④ 自意識が芽生えたため、空想ができるようになり、自然へのまなざしに神や悪霊の姿が重ね合わさるようになった。

問六 傍線部(2)「さらに特殊な進化の形態へと進ませた」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

11

- ① 空想が現実を生み出すだけでなく、空想そのものが現実となる情報化社会を本能的に目指すようになった。
- ② 空想よりも妄想の影響の方が強くなり、肉体を壊すまで食べるようになった。
- ③ 空想を他人と共有、交換しながら膨らませ、現実のものにしていくことによって、状況を改善するようになった。
- ④ 自然の本能に従って状況を改善・改良していくことによって、進歩を遂げるようになった。

問七 傍線部(3)「文明は壮大な空想の産物である」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

12

- ① 人間は、工業都市や産業化社会を空想していたということ
- ② 現代の情報化社会では、現実そのものが空想であるということ
- ③ 空想を実現することの積み重ねによって築かれたのが人間の文明であるということ
- ④ 文明は空想によるものであり、実体がないということ

問八 傍線部(4)「文明がその空想にもとづいている以上、私たちは永遠に満足できない可能性がある」とあるが、それはどういうことか。国語記述解答用紙に、四十字以上六十字以内(句読点を含む)で記述しなさい。

[illegible]

（この枠は下書き用です。別紙の国語記述解答用紙に記入のこと。）

Ⅱ 次の文章は、村山早紀の『星をつなぐ手 桜風堂ものがたり』の一部である。以前、老舗書店・銀河堂に勤めていた月原一整は、今は、山間の小さな書店・桜風堂に勤めている。ある日、一整が売りたい時代小説『紺碧＊１の疾風』シリーズ最新刊を、版元＊２が桜風堂には配本＊３しない方針であることがわかったため、同書の発売日までに銀河堂書店から五冊を届けてもらうことにした。しかし、発売日の前日、なぜか版元からも五冊が届くとともに、著者・高岡源自身が桜風堂に現れた。以下は、それに続く場面である。よく読んであとの設問に答えなさい。

高岡は、ふと目を上げた。

目の端に、版元の名前入りの段ボール箱を認めたようだった。口の端が楽しげに笑う。

「おや、間に合ったようですね、新刊」

一整は、思わず訊きき返した。

「——ご存知でいらしたのですか？」

桜風堂書店に、今日、発売前の『紺碧の疾風』が五冊届くことを。

「わたしが送るように頼みましたからね」

さりと高岡が答えた。

「先生が？」

「こないだね、『紺碧の疾風』の版元にサイン本を作りに行ったんですよ。そのとき、月原さんと桜風堂書店さんの話が出ましてね。ちょっと聞いたら、失礼ながらこちらの店には初回の配本があるかどうかかわからない、たぶんないだろう、とかいうじゃないですか。じゃあ念のために送ってくれ、と強く頼んだんですよ。」

月原さんのいるお店に、『紺碧の疾風』の新刊がないなんて、ありえないでしょう？」

高岡は服の袖をまくって、テーブルの前の椅子に腰をおろした。

「もしそれで本がダブるようなら、今日買って帰ろうかと思ってました。——でも、大丈夫だったかな？」

一整は何も答えず、ただうなずいた。

涙がこみ上げてきた。

「ご配慮^{はいりょ}ありがとうございます。なぜ……」

わたしごときのために、そこまでしてくださったのですか。そう訊きたくて、でも言葉にならなかった。

高岡は慣れた手つきで、サイン本を作りながらいった。

「きみはね、わたしにとって恩人なんですよ。本を売ってくださってるってこともそうなんだけど、ちょっと印象深い記憶があつてね。

あれは『紺碧の疾風』の七巻が出るときのことです。わたし、初めてスランプになりましたね。急に、原稿の書き方がわからなくなっちゃって。書いても書いても、面白いものが書けないんですよ。それまで特に苦勞もなく楽しく書いていたものだから、どうしたらいいのか、わからなくなっちゃったんですね。

何しろ、それまではずっと無名の作家だったのが、このシリーズでいきなり人気作家になっちゃったものですから、書けないときはどうしたらいいのかなんてわからなかった。担当編集者にも相談できませんでしたね。話したら見捨てられそうな気がして。ええ、年はとっていても、新人作家みたいなものでしたからね。

でも約束した^{しめ}切りはやってくる。わたしは会社にも勤めてますから、社会人として、仕事上の約束だけは果たさなければいけないと、自分で自分を追い詰めました。ちょうど、夢見ていた人気作家というものになろうとしていた時期でしたから、^(ア)ヨケイに焦りもしました。ついには、こんなに辛い^{つら}ならもう作家なんかやめちゃおうかとまで思い詰めました。

ある日曜日——家にいて、パソコンの前にいるのが辛くてね、あてもなくふらふら街を歩くうちに、ふと、銀河堂書店に行ってみようと思ったんですよ。書店に行けば、なにか仕事の参考になるような本があるかも知れない。^(A)藁^{わら}にもすがるような気持ちでした。うちからはほんのちょっと遠かったから、それが銀河堂さんに初めて行った日でした。そう、正式にお店に書店まわりにうかがった、それよりもずっと前のことになります。

で、書店に行くとなると、気になって、自分の本が置いてあるところにやはり行ってしまっくんですね。『紺碧の疾風』を探すと、まあ、棚と平^{きらい}台に綺麗に既刊が並べられて、読みやすい字で的確に内容が^(イ)シヨウカイされた、^{*4}POP^{ポップ}までつけてくださっているじゃないですか。既刊がみんな得意そうに幸せそうに見えてね。わたしは感動して、しばらく棚の前に立っていたんですよ。

そしたら、他のお客様を連れて、書店員さんがこちらに来る^{けはい}気配がしてね。慌てて、棚の陰に隠れたんです。なんか

a

ね。

お客様は、『紺碧の疾風』に興味を持って探しに来た方で、連れてきたのは文庫担当の若い書店員——そう、月原さん、きみでした。きみはそれのお客様に、既刊が並べてある場所を教え、『紺碧の疾風』がいかに面白いのか、淡々と、でも想いを込めて伝えてくれた。

お客様は楽しそうにそれを聞いて、既刊をみんな抱えて、レジに向かっていきました。

若い書店員さんは——月原さん、きみは、そのお客様の背中におジギをしたんですよ。深く頭を下げて、ありがとうございます、と。そうしてずうっと、そのお客様のうしろすがたを見守っていました」

覚えていない、と一整は思った。

そんなことがあったろうか。——ただ、いかにも自分がしそうなことだと思った。彼にはありふれた、当たり前のことだったから。

自分が好きで、推している本を買ってくださるお客様に、せめて頭くらいは下げたいし、レジに向かう姿を見守りたい。書店員として、当たり前だと思うのだ。

高岡は言葉を続ける。

「それを見たとき、わたしは思ったんですよ。自分の書く原稿は、本になってそれで終わりじゃないんだって。こうして、本を、読み手に渡すひとがいる。原稿を書いたわたしの思いまで預かるようにして、ありがとうございます、と、本を手にするひとに頭を下げるひとがいる。

ひとりじゃないんだ、と思ったんですよ。

わたしはひとりで原稿を書いているように思っていたけれど、その先には、きみたち書店員が、手を広げて待っていてくれるんだな、と。完成した本を、読者さんに手渡すために。

で、思い出したんですよ。『紺碧の疾風』が売れるようになったのも、全国の書店員さんたちが、それぞれの店で、この本は面白い、売りたい、と声を上げてくれたからだだったんです。売れない作家、消えた作家と何度もいわれてきた、わたしの本を見出してくれたのは、きみたち、書店員さんだったんですよ。

(1) 不思議なものです。帰宅してから、するすると原稿が書けるようになりました。それも楽しくね。自分が書きたかったこと、あたたかな気持ちや、ひとの優しさや、思わず笑ってしまうような、愛らしい冗談や、胸が空く剣戟や、ほのかなレンジョウや、熱い友情や正義や謎解きや。そんなものが溢れるように浮かんできて、止まらなくて。原稿を書くって楽しいなあ、と久しぶりに思いました。早くこの作品を書いて、書き上げ

て、本にして、新刊を待っている読者さんに読んで欲しいって。銀河堂のあの書店員さんが、お客様に胸を張って勧めてくれるような本を早く世に出さなくては、ってね」

さらさらと、高岡はサイン本を作り上げて行く。ふと目を上げて、一整を見た。

「誰も知らないことですね。今日まで誰にも話したことがなかったから。そういうわけで、『紺碧の疾風』は危うく六冊で終わっちゃうところだったんです。月原さん、きみは、あのシリーズの恩人です。あらためまして、あのときは、ありがとうございます」

それでなのか、と、一整は微笑み、目の端の涙を拭いながら、思い返していた。

書店まわりにきたときの、あの高岡の感謝を込めた握手^{あくしゅ}は、あの手に力がこもっていたのは、⁽²⁾そういう理由があったのか、と。明るい声で、高岡は続けた。

「月原さん、あのね。もし何かわたしの本のことで困ったことや、力になれるようなことがあったら、いつでも遠慮無く相談して欲しいんですよ。わたしはきつときみの力になりますから。特に『紺碧の疾風』に関してはね。」

わたしは減多に怒る方じゃないんですが、ちよつと営業の若いのがひどくてね。自分が長年営業職だったってこともあって、怒っちゃいましたよ。もつとお店を大事にするべきだ、って。その手で本を並べて売ってくれるのは、書店員さんなんだからね、って。そりゃ商売は大事だけれど、店の大きさや、店がある場所で待遇^{たいぐう}を変えてどうするんですか、って。いくら大手の版元だからって、『偉く』なっちゃだめだって。小なりともデザイン会社勤務なもんで、無関係な業種でもなく、よけいに腹がたつたのかも」

一整はつい笑ってしまった。——なるほど、版元から送られてきた『紺碧の疾風』に添え書きもアイサツも^(オ)ついていなかったのは、そういうわけだったのだろう。あの版元の営業氏は、きつとふてくされて発送したのだ。ベストセラー作家の頼みは無視できず、けれど、内心では叱責^{しつせき}に腹が立って。

「——だけど」

一整は訊^{たず}ねていた。「こんな風^{ふう}にしていただけるのは、とても嬉しいことなのですが、版元に無理なことを頼んで、結果、先生がご迷惑^{ごめいわく}を被^ひるというようなことはないのでしょうか？ たとえば、仕事がしづらくなるとか」

『紺碧の疾風』は大ベストセラーだから、そこまで著者の扱いが悪くなることもないだろうと思うけれど、疎^(C)まれて、居心地が悪くなるようなこ

とはないのだろうか？

「月原さん、出版社はひとつじゃないんですよ」

さらりと高岡は答えた。

「あの版元とのつきあい不幸にして終わったとしても、わたしがよい仕事をしていれば、新しい仕事はきっとどこかできると信じて、こつこつと新しい作品を書けばいいんです。わたしは売れない時期が長かったですからね。また最初からやり直すだけです。全然、たいたことじゃない。懐かしいくらいのもんです。」

いいものを書いて、本になったなら——ねえ、月原さん、きっとまたきみたち書店員さんが見出して、売ってくれるんでしょう？」
にっこりと笑った。

「はい」

⁽³⁾「一整は力強くうなずいた。「でもその前に、『紺碧の疾風』を売ります。最新刊も、ベストセラーにしましょうね」

箱から届きたての新刊をとりだして、高岡の前に並べた。この五冊とこれから届く五冊。すべてをサイン本にしても大丈夫、売り切ってみせろ、と思った。

（出題にあたって、本文を一部改変した）

*注1 紺碧 夏の晴れた空のような、やや黒みをおびた深く濃い青色。

2 版元 図書などを出版する所。出版元。発行所。

3 配本 版元が業者に依頼し、発行した書物を小売書店に届けること。

4 POP 書店で書籍などの商品を宣伝するために、書店員が手作りする広告のこと。

問一 傍線部(ア)・(イ)・(ウ)・(エ)・(オ)のカタカナは漢字でどう書くか。解答例にならない、それぞれ①～⑩の中から正しい組み合わせとなる漢字を二字ずつ選び、同一解答欄にその番号を両方ともマークしなさい。

(ア) 13

(イ) 14

(ウ) 15

(エ) 16

(オ) 17

(解答例) トクテイ

- ① 得
- ② 徳
- ③ 特
- ④ 匿
- ⑤ 督
- ⑥ 帝
- ⑦ 定
- ⑧ 底
- ⑨ 訂
- ⑩ 呈

答 ③ ⑦

(ア) ヨケイ

- ① 予
- ② 余
- ③ 与
- ④ 預
- ⑤ 世
- ⑥ 計
- ⑦ 敬
- ⑧ 携
- ⑨ 継
- ⑩ 慶

(イ) シヨウカイ

- ① 省
- ② 詳
- ③ 承
- ④ 照
- ⑤ 紹
- ⑥ 界
- ⑦ 会
- ⑧ 皆
- ⑨ 解
- ⑩ 介

(ウ) ジギ

- ① 辞
- ② 示
- ③ 持
- ④ 事
- ⑤ 時
- ⑥ 疑
- ⑦ 儀
- ⑧ 技
- ⑨ 欺
- ⑩ 戯

(エ) レンジヨウ

- ① 練
- ② 連
- ③ 廉
- ④ 恋
- ⑤ 鍊
- ⑥ 場
- ⑦ 状
- ⑧ 讓
- ⑨ 情
- ⑩ 錠

(オ) アイサツ

- ① 相
- ② 愛
- ③ 挨
- ④ 哀
- ⑤ 合
- ⑥ 刷
- ⑦ 察
- ⑧ 札
- ⑨ 冊
- ⑩ 拶

問二 傍線部(A)・(B)・(C)の本文中における意味として最も適切なものを、それぞれ①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

(A) 18

(B) 19

(C) 20

(A) 藁にもすがる

- ① その内容をよく知る人に頼ると良い案をもらえる
- ② いつもしないことをして気晴らしをする
- ③ 探したいものと似たものがある場所にいくとうまく見つかる
- ④ 頼りになりそうもないものまで頼りにする
- ⑤ 雰囲気を変えることで違うものを作る

(B) 胸が空く

- ① 心の奥から深く感じる
- ② 心が晴れてスカッとする
- ③ 何も考えない状態になる
- ④ 興奮して気持ちが高ぶる
- ⑤ そのことしか考えられなくなる

(C) 疎まれて

① うらまれて

② 注意深く見守られて

③ 馬鹿にされて

④ 言う通りにさせられて

⑤ 嫌がられ遠ざけられて

問三

空欄

a に入る語句として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

① 興奮して

② イライラして

③ 恐ろしくなって

④ 恥ずかしくて

⑤ ドキドキして

問四 傍線部(1)「不思議なものです。帰宅してから、すると原稿が書けるようになりました」とあるが、それはなぜか。最も適切なものを、

次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

22

- ① 自分の本の面白さを月原が説明してくれたことで、次に何を書けばよいのかがわかったから
- ② 自分の作品の人気を確認できたことで、読み手のために書かなければならない責任を感じたから
- ③ 自分が人気作家であることがよくわかり、どのような作品でも売れると安心できたから
- ④ 自分ひとりの力で書いていたわけではなく、その先には書店員がいて自分を支えてくれることに気づいたから

問五 傍線部(2)「そういう理由」とは何をさすのか。最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

23

- ① 高岡が月原を『紺碧の疾風』シリーズを続けることができた恩人だと感じていたこと
- ② 『紺碧の疾風』の面白さの淡々とした伝え方に不快感を抱いていたこと
- ③ 本当は書くのが辛いのに、月原がどんどん売ってしまうと書き続けなければいけないと苦しく思っていたこと
- ④ 棚の陰から見ていた書店員に再会できたことが嬉しかったこと

問六 傍線部③「一撃は力強くうなずいた」とあるが、そこにはどのような思いが込められていると考えられるか。最も適切なものを、次の

①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

24

- ① 良いものを書けば必ず見出して売ってくれるだろうという作者の期待と信頼に応えようという思い
- ② 作品の完成度が高い低いにかかわらず、書店員はどのような本であっても全力で売らなければならないという思い
- ③ どの版元であっても、大ベストセラー作家である高岡の新刊ならばよほど出版してくれるだろうという思い
- ④ 大ベストセラー作家である高岡ならば、どのような態度をとっても悪い扱いにはならないはずだという思い

問七 本文の内容と一致しないものを、次の①～⑥の中から二つ選び、同一解答欄にその番号を両方ともマークしなさい。

25

- ① 月原は、書店員として続けてきた自分の姿勢に自信を持ち、これからも頑張ろうと思っている。
- ② 高岡は、自分の作品に自信をもっており、最初から売れると信じていた。
- ③ 月原は、高岡がなぜここまでしてくれるのかわからなかったため、当初は戸惑っていた。
- ④ 高岡は、良い作品を書けば必ず読者へ届けてくれる書店員がいることを知った。
- ⑤ 月原は、義務感から本を売っており、本を購入するお客様を大切にすべきであると考えている。
- ⑥ 高岡は、作品の恩人である月原に恩返しすべく、版元に無理を言って桜風堂に配本させた。

Ⅲ 以下のそれぞれの設問に答えなさい。

問一 次の(1)～(3)の傍線部と同じ漢字を用いるものを、それぞれ①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

(1) 26

(2) 27

(3) 28

(1) この音楽のチヨサクケンは彼が所有している。

① 晩年に才覚をアラワす

② 喜びを顔にアラワす

③ 新しい小説をアラワす

④ 馬脚をアラワす

(2) お神酒を神社にオサめる

① 税金をオサめる

② 大学で学問をオサめる

③ 新興国をオサめる

④ 試合で勝利をオサめる

(3) 応援席からカンセイがあがる

① 新入生のカンゲイカイを行う

② おもてなしにカンドウする

③ 昆虫にカンシンをもつ

④ 遊園地でカンランシャに乗る

問二 次の(1)～(3)に示した熟語の対義語を完成するために、解答例にならない、それぞれ①～⑧の中から正しい組み合わせとなる漢字を二つ選び、
 順番は無視して、同一解答欄にその番号を両方ともマークしなさい。

(解答例) 能動 ↑ ↓ ☐ ☐

- ① 受
- ② 行
- ③ 動
- ④ 物
- ⑤ 態
- ⑥ 働
- ⑦ 授
- ⑧ 熊

答 ① ③

(1) 抽象 ↑ ↓ ☐ ☐

- ① 身
- ② 具
- ③ 答
- ④ 文
- ⑤ 対
- ⑥ 体
- ⑦ 絶
- ⑧ 応

(2) 必然 ↑ ↓ ☐ ☐

- ① 燃
- ② 自
- ③ 偶
- ④ 遇
- ⑤ 泰
- ⑥ 然
- ⑦ 判
- ⑧ 全

(3) 保守 ↑ ↓ ☐ ☐

- ① 攻
- ② 皮
- ③ 勢
- ④ 過
- ⑤ 新
- ⑥ 命
- ⑦ 鮮
- ⑧ 革

(1)

(2)

(3)

問三 次の(1)・(2)のカタカナ語の意味として適切なものを、それぞれ①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

(1)

32

(2)

33

(1) ジェンダー

- ① 社会的、文化的な男女の違い
- ② 生物学的な男女の違い
- ③ 社会的な性差からの解放
- ④ 女性の権利の保護
- ⑤ 男性の権利の保護

(2) ナショナリズム

- ① 個人の自由や利益より、家族全体の利益を大切にする考え方
- ② 自分の利益だけを重んじる考え方
- ③ 国家全体の利益より、個人の自由や利益を大切にする考え方
- ④ 世界を一つの共同体とする考え方
- ⑤ 国や民族の自主・独立を重んじる考え方

問四 次の(1)・(2)の慣用句の空欄に入る漢字を、それぞれ①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

(1) 牙にも掛けない

- ① 口
- ② 舌
- ③ 唇
- ④ 首
- ⑤ 歯

(2) が煮えくり返る

- ① 脳
- ② 肺
- ③ 胃
- ④ 腸 はらわた
- ⑤ 肝

(1) 34

(2) 35